シーワールドのアニマル達

●マトウダイ

マトウダイは、青森県以南の水深100m～200mの海底に生息する体長50cmほどの魚で、あまりなじみがありません。フランス料理の材料などで世界的に珍重されていますが、飼育が難しく水族館でもあまりお目にかかることがない魚です。飼育にあたっての最初の難関は採集です。採集は主に鴨川沖にある定置網で行いますが、水圧の変化に弱いマトウダイは、網を揚げる際に、お腹の中の「うきぶくろ」のガスが膨らみ、ひっくり返って水面に浮かび上がってしまいます。そのままでは泳げずに死んでしまうので、注射針でお腹のガスを抜き、泳げるようにして水族館に運んできます。次の難関は、餌付けです。エサは、生きた小魚ですが、最初のうちはエサの小魚にも驚いてしまうこともあるので、少し弱らせてから与えます。それでもエサを食べないときは、強制的に口の中に小魚を入れて与えます。最後に、神経質なマトウダイは水そうからの移動や掃除など、少しの環境変化でもショックを起こしてしまいます。細心の注意を払って飼育していますが、それでも元気だったマトウダイが次の朝には調子を悪くしていることもあり、気が抜けません。

展示中のマトウダイは、飼育日数が200日を過ぎ、水そうにもだいぶ慣れて水面まで来てエサをねだるようになりました。まだまだ気は抜けず、これからもいろいろな問題が予想されますが、マトウダイの長期飼育に挑戦していきます。

（齋藤 純康）

●カリフォルニアアシカの「シャル」

カリフォルニアアシカは、その名のとおりアメリカ西海岸沿岸に生息するアシカの仲間で、日本では数多くの動物園や水族館で飼育されているなじみ深い動物です。大変記憶力がよく、すばやい動きを活かしてアシカパフォーマンスで活躍しています。現在、パフォーマンスの他にも「アシカ・アザラシの海」で6頭のカリフォルニアアシカを展示していますが、その中に水中観覧窓で夢中になって観客と遊ぶ子供のアシカがいます。この遊び好きなアシカは、2003年6月25日に鴨川で誕生したメスの「シャル」です。「シャル」は、プールの中を泳ぎながらガラス面をのぞいて遊び相手を捜していますが、人影を見付けるとガラス越しに観客の様子をじっと見つめます。観客は、突然目の前に現れた「シャル」に少し驚きながらも、手を振ったり、ガラスをたたいたりしてなんとか気を引こうとします。「シャル」はそれに愛嬌たっぷりのしぐさで応え、窓から窓への追いかけっこをしたりして楽しそうに遊んでいます。連日たくさんの観客を喜ばせています。今では、「ガラス面で遊ぶアシカはどこにいますか？」と質問を受けるほどの人気を集めています。そんな「シャル」も生後3年目を迎え、最近ではパフォーマンスのスターを目指して訓練を始めています。人との遊びの中で見せる集中力を発揮して、きっとロッキースタジアム一杯の観客を楽しませてくれるアシカに成長することでしょう。

（鷹野 美久）

▲マトウダイ *Zeus faber*

▲カリフォルニアアシカ *Zalphus californianus*

さかまた No.66 （禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296-0041 千葉県鴨川市東町1464−18
☎（04）7093−4803
http://www.kamogawa-seaworld.jp
発行日 平成17年12月

さかまた

鴨川シーワールド NO.66

鴨川の四季と水の生き物たち

▲東条海岸に現れた2頭のスメナリ

鴨川シーワールドがオープンして35年がたちました。この間、施設は充実され、展示は改善を重ねてたくさんのお客様をお迎えしてきました。鴨川の町も大きく様変わりをし、道路も整備されて大変便利になりました。一方、鴨川の海と里山の自然は今でも大切に守られていて、海辺や木々の間を散策してみると、虫や鳥の声、草木の様子、空模様などから季節の移り変わりを肌で感じとることができます。鴨川の海は居心地がよいのか、小型イルカのスナメリは、一年を通して見られますが、このような野生動物は少数派で、毎年、同じ時期、同じ場所に姿をあらわしては消えていく生き物が多いことに気付きます。今回は、自然豊かな鴨川で見られる、四季折々の水の生き物を中心に紹介します。

3月6日は、暦では啓蟄といわれ、土の中から虫たちが長い冬の眠りから目覚めます。この日と前後して、田んぼではカエルの声が聞かれ始め、本格的な春の到来が感じられます。

3月から4月の海は、水温が15℃前後と一年で最も低く、海底から海面に向かう大きな流れが起こるので、タチウオやタイ類、深海性のサメ類などの海底で生活をする魚が定置網に入り、飼育係

▲鴨川沖でのマンボウの採集

▲ゴマフアザラシの「カモちゃん」

にとっては採集の好機と言えます。春先はマンボウの盛期でもあり、体長50cmほどのマンボウの幼魚や、メジと呼ばれるクロマグロの若魚などが回遊してきます。砂浜でハマヒルガオの花が咲くと夏はもうすぐです。

▲砂浜に咲くハマヒルガオ

夏

梅雨入りした里山の川や池ではコロ、コロ、と繁殖シーズンを迎えたモリアオガエルの鳴き声が聞かれ、水辺に張り出した木の枝には、ソフトクリームのような白い卵塊が見られます。また、毎年、決まった田んぼや用水路で青緑色の光を明滅させて飛ぶのはヘイケボタルです。

朝の浜辺を散策するとキャタピラー痕のような足跡を見かけます。アカウミガメが卵を産みにやって来たのです。足跡の折り返し地点の砂中には100個ほどの卵が埋められています。6月中旬の大潮の日には、満潮に合わせてクサフグが大群で産卵をします。月の満ち欠けに合わせて繁殖する水の生き物は、他にエビ・カニ類、サンゴなどが知られていていますが、生き物たちがどのようにして繁殖の時を知ることができるのか不思議でなりません。海に浮かぶ茶褐色のかたまりは、「稚魚のゆりかご」と呼ばれる流れ藻です。藻の中にはイシダイやカワハギ、ブリ、シイラ、トビウオなどの稚魚が潜んでいます。真夏の海には、しばしばサビ色の赤潮が発生し、夜になると赤潮は光を放ちます。打ち寄せる波が崩れる瞬間に、波全体が青く光る不思議な光景で、夜光虫と呼ばれる発光プランクトンのしわざです。発光は、撮影できないほどのほのかな光ですが、闇夜に輝く美しい波はとても神秘的です。

8月下旬、田園では早い稲刈りが始まり、セミの声がツクツクボウシだけになると夏はそろそろ終わりです。

▲波打ち際でのクサフグの産卵

▲流れ藻につくシイラの稚魚

秋

朝夕が過ごしやすくなる9月ですが、日中は、まだ強い陽射しが照りつけて砂浜表面の温度は50℃以上にまで上がります。砂の中でふ化したウミガメの子どもは、砂の表面が20℃ほどに下がる夕暮れから夜にかけて一斉に砂からはい出し海へと旅立っていきます。産卵場所を見守ってきた飼育係による今年のウミガメの保護活動はこれでひと段落といったところです。

海水温は、一年で最も高く26℃にもなることがあります。砂浜の波間にはコバンアジの幼魚、港や磯では、チョウチョウウオの幼魚などのサンゴ礁の魚が姿をあらわします。いずれも卵や稚魚のころに黒潮にのって房総半島までたどり着いた死滅回遊といわれ、南房総の冬を越すことができない魚たちなのです。

▲海へと向かうアカウミガメの子ども

10月から11月は、飼育係にとっては今年2度目の採集シーズンです。海水温が20℃に近くなるころ、さまざまな種類の外洋性のサメやエイ、アジ類、シイラなどがやって来ます。

草むらの秋の虫は、11月に初霜が降りるとピタリと鳴きやみ、早朝と夕暮れに遠くの山から聞こえるピーという声は牡鹿の鳴き声です。

12月になると、北の国からたくさんのカモメが飛来し、北風が吹く時化の日には大群となって砂浜や河口で羽を休めます。波穏やかな朝にはハマグリ漁が行われ、50隻ほどの小舟が海岸に沿って一列にならぶ光景は冬の風物詩と言えます。年が明けて1月下旬になると、漁師がしかけたヒラメの底刺し網に、しばしば巨大なタカアシガニが掛かります。食べごたえのありそうな大ガニですが、味はいまひとつだそうです。

2月の冷たい雨が降った翌日で気温がゆるむ日、北の斜面の田んぼにできた水たまりには、バナナの形をしたトウキョウサンショウウオの卵塊が見つかります。この後、寒い日は少しずつ少なくなり、ウグイスの初鳴とともに、また春がやって来ます。

▲トウキョウサンショウウオの卵塊

北の海で生活をするゴマフアザラシが、最初に鴨川にあらわれたのは平成14年の3月でした。「カモちゃん」と名付けられ人気者となり、4月にその姿を消しましたが、翌年の1月に再び鴨川にやって来て大変な話題となりました。「カモちゃん」は、心地良い鴨川の海を憶えていたに違いないと多くの人々が感じた出来事でした。

（岡田　勇治）

トピックス

元気になりました！子シャチの「サラ」

▲「遊んでー」人懐っこい「サラ」

子シャチの「サラ」は、今年5月31日に満2歳を迎え、お姉さんの「ラビー」(7歳)、「ララ」(4歳)と共に元気にすくすくと成長しています。

「ラビー」「ララ」が生まれた時は、母親「ステラ」が子どもの世話をせず、授乳までにずいぶん時間がかかり係員を心配させましたが、「サラ」の時には3頭目ということもあってか、すぐに子どもの面倒をみはじめ、授乳もスムーズに行われました。その後「サラ」は、順調に成長していましたが、今年の5月上旬より体調をくずしはじめました。体温測定や血液検査をしても異常が見当たらず、薬を与えて様子を見ていましたが、回復の兆しが全く見えませんでした。少しずついつもの元気がなくなっていき、泳がず水面に力無く浮いている事が多くなり、ついにはエサも食べなくなってしまいました。エサを食べないと薬を与えられません。仕方なくプールの水を全部抜いて「サラ」に注射を行うことにしました。水の無くなったプールで、父親「ビンゴ」と母親「ステラ」の間にはさまれた「サラ」に注射を行う事は容易ではありません。「サラ」が「痛い！」というような感じで鳴き声を上げた時には、「ステラ」が「サラ」をかばおうとして大あばれする一幕もありました。落水をしての「サラ」の治療は8日間にもおよび、昼も夜も付きっきりでの看病が続きました。

▲針にチューブをつけた特製注射器を使って治療中

獣医・係員の必死な看病の甲斐もあり、その後少しずつ回復し始め、8月にはすっかり元気になりました。今では、エサのホッケを毎日30kgも食べ、元気にジャンプをしたり、近付いて来た係員に胸びれを振って遊びをせがんだりするほどです。2歳を過ぎた遊び盛りの「サラ」の今後の成長を温かく見守っていきたいと思っています。

▲落水したプールで母親「ステラ」（左）
父親「ビンゴ」（右）の間にいる「サラ」

（二宮 奈美枝）

▲「エメラルドの入り江」で一緒に泳ぐ成魚と幼魚（体長10cm）

トビウオの飼育展示

トロピカルアイランドでは、2001年よりトビウオの飼育展示を試みています。トビウオは、大きな胸ビレを広げ海面上を数百mも滑空することで有名ですが、非常に弱く長期飼育の難しい魚で、水族館ではめったに見ることができません。初夏から初秋にかけて房総沿岸に回遊して来たトビウオを、鴨川沖の定置網から採集しています。トビウオはうろこがはがれて傷つきやすく、とても神経質で水族館に来た当初は、なかなかエサを食べようとしません。採集の時に負った傷の治療が終わり、エサを食べるようになると展示水そうへ移しますが、ちょっとしたことで驚いて水そうから飛び出してしまいます。夜間は水そうに飛び出し防止ネットを設置したり、照明を点けて水そう中央にトビウオを集めるようにするなどの工夫をします。

▲トビウオの成魚（体長30cm）

トビウオの成魚の展示とともに稚魚の飼育展示も2年前から始めました。今年は、7月5日から9月30日まで稚魚展示水そうで特別展示をしていましたが、その後も約80尾が順調に育ち体長10cmほどに成長したので、10月16日からエメラルドの入江で成魚とともに展示することができました。この幼魚は、成魚から採取した卵を人工授精によりふ化させ育てたものです。ふ化した時は体長8mmほどでしたが、稚魚や幼魚は常にエサを必要とするので、生きたプランクトンなどを滴下して、いつでも食べられるようにして育てました。エメラルドグリーンの美しい水そうで大きな胸ビレを広げて泳ぐトビウオの幼魚に思わず「頑張れ！」と声をかけたくなります。今後は、幼魚の成長を見守るとともに水そうで産卵させたいと思っています。

▲トビウオの稚魚の展示

▲ふ化1ヵ月後のトビウオの稚魚（体長25mm）

（古市 敦子）

モラ モラ

●功労動物に表彰されたスリム

バンドウイルカの「スリム」(メス・推定年齢37歳)が、毎年行われる動物愛護週間(9月20〜26日)で功労動物の表彰を受けました。功労動物表彰は、人間と動物の親善、繁殖や飼育記録など功績のあったそれぞれの動物達を称える賞で、今年度は「スリム」を含め全国の動物園などで飼育され、活躍している動物たち11件の受賞がありました。「スリム」は、現在、国内のバンドウイルカの中で最長飼育記録を更新中で、パフォーマンスやふれあいを通じて多くの人々に感動と楽しさを提供してきたことや、これまでに10頭を出産し、平成15年には国内初となる人工授精による繁殖にも貢献してきたことなどが高く評価され、今回の表彰となりました。

(加藤 加奈)

●好評！「ウミガメ教室」

8月20〜31日と9月23〜25日に入園されたお客様を対象に「ウミガメ教室」を開催しました（1〜2回/日、定員40名、20分間）。

「ウミガメ教室」は、鴨川シーワールドが4年前から取り組んでいるアカウミガメの保護活動の一環として行ったもので、目の前に広がる東条海岸や前原海岸でのアカウミガメの産卵状況や卵や子ガメの保護活動を解説しました。子ガメが砂の中から脱出する瞬間を撮影した貴重なビデオを見たり、ふ化したばかりの子ガメを直接触った参加者からは、「わぁーすごい」「かわいい」などの声が聞かれ、質問も多く、15日間にわたって開催された「ウミガメ教室」には延べ563名が参加されるなど、大変好評でした。

(大澤 彰久)

●セイウチの給餌体験

開園35周年を記念し、10月1日から2日間、シャチ、セイウチ、ウミガメなどの給餌をお客様に体験していただく催し物を行いました。中でもセイウチは普段間近に接する機会がなく、参加者の反応は様々でした。給餌体験の相手として抜擢されたのは、今年5歳になったメスのミックです。体重450kgという大きさに「怖い」と退く子どももいましたが、「チュルル」とエサを吸い込んで食べる姿に驚きと笑いの歓声があがりました。「吸われてもエサをはなすものか」と力比べをする方もいましたが、いとも簡単に吸い込まれ、その力にまたしてもびっくり。直接体やヒゲに触れるなど、めったにない体験ができた催し物になりました。

(小林 夕希栄)

●動物園水族館設備会議を開催

9月28・29日、鴨川シーワールドにおいて第15回動物園水族館設備会議が開催されました。この会議は設備担当者が、飼育現場での設備的改善や問題点の情報交換を目的として毎年開催しているもので、今回は61団体105名の参加がありました。研究発表では、「鴨川シーワールドの省エネルギー対策」、「サンゴ流動床を用いたpH調整装置の導入について」、「水中クリーナーの試作開発について」の他6題の研究発表と全体討議が行なわれました。翌日にはエネルギーセンターの設備を中心に施設見学を行い、この2日間で交わされた様々な情報が、今後、水族館や動物園の飼育環境改善に役立てられる事を期待しています。

(佐野 孝明)